

新たな学びの創造（究める）：門池学習

<http://www2.tokai.or.jp/kadoty/>



I 実践の概要

1 学習材としての魅力を求めて

本校の南に位置する門池は、へらブナつりのメッカとして県内はもとより関東圏にまで知られています。桜の季節になると、決まって桜の木の向こうに富士を仰ぐ位置に座を占めて釣り糸を垂れる釣り客がやってくる、と言います。

富士が池面に逆さに映るといふ風光明媚なことはもとより、鎌倉時代、上津池として歴史上に名をあげて以来、幾多の水争いの歴史を経て、用水池からレジャーの池としての変貌を遂げていくこの池の歴史は、この地の農業そのもの歴史でもあり、旧大岡村と旧金岡村のそれぞれの一部が一つになって、やがて門池という地域が興っていく歴史でもありました。平成11年4月は、機運高まって門池連合自治会が設立に至り、翌年、平成12年には門池コミュニティも設立されていくという、少しオーバーに言えば、地域創世の只中に位置していたのです。

また、この池に飛来する種々の野鳥や周辺の植物群等のこの池をめぐる生態系は、自然を学ぶに格好の環境であるし、多くの命を育てている、この池の水質などの現状は、現代的な課題となっている環境問題を考える上で、貴重なデータを提供してくれる学習材という評価もできます。

研修部員は、この門池の周囲・周辺を歩いて研修部自らが門池の植物群や野鳥を観察したり、あるいは遺跡を見学したりしながら、門池の学習材としての可能性を探ったのでした。

総合的な学習にとっての教材探し。教室から地域へ。教材探しの旅が始まりました。

2 自校の教育課題を見つめて；教育課程の工夫改善と門池学習

「木を見るより森を見る」。門池学習の推進に当たり、総合的な学習が位置づけられた新教育課程の理解に努め、教育課程や学校経営の工夫改善から始めました。本校の門池学習は、新しい学校づくりの一貫としてスタートしたのでした。

(1) 本校の教育課題の克服を目指して

平成10年度末の学校評価の中で多くの先生から、本校の生徒について「自立心が弱い。」「主体性に欠ける。」「自ら活動することに欠けている。」という「自ら」の育成にかかる課題を指摘されました。評価は、生徒の評価と指導の評価と教育課程の評価があって初めて機能します。本校の生徒の「自ら」に係る課題克服を目指し、そのねらいと場と時間が確保された教育課程編成、門池学習もこの文脈の中に位置づけられています。

(2) 教育課程の工夫・改善

門池中の教育課程は次の4点を特徴にしています。

- ステージ制 ・学期制から1年間を4つのステージに分けています。
- 日課の工夫 ・学年、学級の創意を活かす時間や生徒が自分の計画で使える時間があります。
- 門池学習 ・総合的な学習を推進しています。これを門池学習と呼んでいます。
- 選択教科 ・発展的学習・課題学習と補充的学習のコースがあります。

ア、ステージ制による教育課程と学校運営

1年間が4つのステージで運営されています。学期制を残しつつステージ制への

移行を図ったのは大きく分けて次の三つの理由からです。

一つは、学校教育目標の具現化を目指し、各教科・領域・各分掌組織が有機的に機能し、様々な教育計画が生きて働くようにするためです。二つ目は総合的な学習の性格によります。門池学習は、「知の総合化」をねらって、「見通す→深める→まとめる→温める」という四つの年間の過程で構成されています。教科等で培った学び方、知識、技能が門池学習で生かされ、教科等との相乗的な効果を生むこと、そのために門池学習を核とした教育課程編成を試みたのです。

三つ目は、門池学習を通年で実施することにしました。その上でその活動を4つの過程に分けました。それが、ステージです。

イ、「自ら」を育むためのしかけ

「自ら」を育むための教育課程上の「しかけ」を用意しました。朝の活動時間やプランニングタイムがそれです。生徒の多様な活動を保証し、生徒の自主的活動を支援する時間として、学級・学年を育てる時間として、また、生徒の自立性を育てる時間として、この時間は位置づけられました。

ウ、選択教科の取り扱いをめぐって

国語、社会、数学、理科の選択教科にあつては、発展学習・課題学習をAコース、補充的学習をBコースとして、選択教科の中に補充的学習を位置づけました。新教育課程の先取りです。

自らをより向上させるために「この学習を広げたい深めたい発展させたい」、あるいは「もう一度学習しなおしたい」といような生徒のニーズに応えるためです。

エ、広がっていく創意工夫；すべての道は・・・

2年生の通称「廊下学習」は、学年部職員が廊下に机と椅子を持ち出し、各教室・廊下を臨時のオープンスペースにして、自主学習を展開します。分からない、分かりたいという願いに学年全員の教師が応えていく時間です。

本校の文化祭では、「ヴェニス商人」「シーザー」等の本格的な演劇が上演されてきました。台本づくりから大道具、小道具、衣装、音響、照明、ポスター、役者、これらは全て公募です。

遠足等でも、修学旅行や自然教室のように学年が自主的・自立的集団として機能するように活動を仕組みます。

学校の様々な場面で「自ら」を育む場を意図的に設定し、生徒の活動を支援する中で生徒の成長を促し、生徒の願いが叶う学校としての道を歩み始めたのです。

II 新たな学びの創造(極める);門池学習の取り組みを通して

1 「自ら」の育ちが成否を握る

門池学習の時間、生徒は、様々な学習を展開していきます。ある生徒は、パソコン室へ出かけ必要なデータを取り出します。集めた資料を整理している生徒もいます。先生に聞きに行っている生徒もいます。門池に出かけ、もう一度採集等に行く生徒もいます。指定された教室へ集まったとしても、教科のように同じ課題で同じ場で同じ速度で学習は展開していきません。それらは、すべて生徒個々の計画に委ねられています。総合的な学習の最も難しい課題がここにあります。

そこには、「自ら学び自ら考える」力の具現化ともいえるべき、生徒個々に強烈な学ぶ意志と意欲それに自己を律する心、さらに各教科・領域を通して得た学び方が必要になってきます。「自ら」の育ちです。

この自主・自立は、門池学習だけで育てられるものではありません。上記の教育課程上の工夫改善に加え、門池学習の展開を支える取り組みとして三つの活動を創意しました。

2 門池学習を支える取り組み

(1) 三方向からのチャレンジ

ア、学んだことが活かされる喜びを

本校の余裕教室を利用した門池文化館には、U字型の深い切り込みのある断層のパネル写真や採取した石の標本、野鳥の羽の数々、地図とともに採取した汚水、発見した微生物の統計、門池の水源ともいえるべき牧堰や校舎の模型、植物標本、歴史的な貴重な写真等々、生徒の学習の成果が分かる資料が所狭しと展示されています。この文化館を学ぶ学習が文化館学習として1年で行われます。3年生は、卒業論文の形で学習を発信し、学習室に収めて卒業です。これを新3年生が学び、自らの門池学習を計画していきます。学んだことは活かされるという実感、これを大事にしました。学ぶ意義を喚起する演出です。



イ、生徒自らの発意を生かす場として（校内ボランティア活動）

「歌い隊」「水やり隊」「落ち葉掃き隊」「何でもし隊」。「柏葉尾隊」（柏葉尾にある特養老人ホームとの交流をします）。これらは、学校の様々な活動に自ら参加して学校の諸活動を支えるボランティアです。地域から提供された草の植え込み作業から出発したボランティアは段々とその輪を広げ、やがて登録制度に発展したこの活動に参加するメンバーは100人を超えました。学校や自分達の生活へ積極的に関わる姿勢。それは、「自ら」を構成する重要な要素です。自分たちの発意や活動、存在が学校にとってかけがえのないものになっているという実感。「自ら」を受け止める懐づくりです。



ウ、地域の人に学ぶ；門池講座

門池学習の最も大きな特徴は、その中に地域人材を招いて開設する門池講座があることです。農業従事者、自治会役員、東名沼津インターグルメ街道振興会の代表、へらブナを放流したり、清掃活動を続けているボランティア団体、「門池愛好会」の代表、門池で有機農業を推進している方、沼津市の文化財センター職員、同じく社会福祉関係者や市史編纂室職員、土木測量の企業人、水族館館長、コンピュータ技師等々、招聘した講師は多彩です。これに教員が加わります。教員もまた特技を発揮します。埋文派遣の経験のある教員は「古代人」講座。釣りの好きな若手教員は「魚」講座です。鳥を紹介する職員もいます。こうして開催される門池講座を地域にも開くのです。学校には学習を支える教師がいる。地域にも学習を相談できる人がいる。このような生徒の学びを軸にした学校・地域との連携を画しました。そしてまた、これらの講座の中で抱いた疑問や関心は門池学習での調査研究に新たな課題を与え、視野を広げていくものと期待しました。

(2) 門池学習推進のための環境整備

ア、不可欠な情報機器

門池学習推進に大きな力を発揮したのは、職員室と図書室がLANで結ばれたコンピュータです。地域の力で設置したこのコンピュータはインターネットにも接続しています。生徒は、これを情報検索に活用していますが、このために技術科情報基礎の一部を1年で実施し、機器操作の基本を学ばせています。学校の実態に応じた教育課

程の編成です。本年度は市教委より新たに44台のコンピュータが配置され、すべてがインターネット対応になりました。

イ、学習情報センターとしての図書室

本校4号棟2階は学習エリアになっています。門池文化館、学習室、図書室という並びです。図書室は文学書を読む場所から情報を得る場所としての整備が必要です。本校の図書室は文献情報とメディア情報が得られる場所として整備され、インターネットが可能なコンピュータを設置しています。書架は開架、教科分類です。

(3) ステージ制を生かした門池学習の展開

門池学習では、3年間を見通し、ステージ制のよさを生かそうとしました。学年毎の目標とステージ毎の目標を定めて、組み合わせました。学習集団も第1ステージと第4ステージで学年・学級集団、第2ステージ、第3ステージで縦割りの課題別集団としました。

第1ステージは自分のテーマを設定できることが目標です。動機付けにかかる重要な過程で、全校によるガイダンス、門池学習の時間の目的やルールなどの確認を経て門池学習そのもの調査等に取り組んでテーマ設定に至ります。この間は学級担任によるきめ細かな指導が適切だと考えました。自分の気づきや関心より誰と組むかを優先する生徒もいましたが、そのようなグループに限って学習が停滞しました。

生徒の気づきや関心・意志、これを優先し、学習したい内容やテーマをもとにできた165のグループをくくって14の課題集団を組織し、学習母体としたのです。

第2・第3ステージの調査研究活動は、これが基礎集団となって進展していきます。

第4ステージでは、学習集団が再び学年学級に戻ります。1年生は、先生方が25分ずつ交替で行う調査研究や発表のためのスキルの講座を受講したり、1年間の門池学習の学習を振り返る門池学習新聞の作成に取り組みました。1年を振り返り自己の学習を温め、2年生の学習に必要な技能修得を図ります。

2年生は、現代的な課題に気づき、その課題の追究に取り組む中で調査研究の方法を修得していく過程として第4ステージを位置づけました。環境問題、少子高齢化問題、福祉、健康、国際化等について調べ、新聞にして掲示しました。課題解決学習体験と現代的課題に対して自分なりの意見をもつスキルです。

3年生は発信です。この期の学習は、学級での発表会の他、卒論と称する小論文集の作成やその読書会です。発信しまとめる過程です。

総合的な学習は、生徒の自ら学ぶ活動で学習が進展していきます。しかし、教師の指導性も大切です。教師の指導と生徒の自主的な学習活動、このレスポンスのよさが総合的な学習において「自ら学ぶ」学習を可能にしていきます。活動目的に応じて適切な学習集団を組織して効果的な指導体制を作ります。そのためにステージ制は効果的でした。

(5) 評価；自己評価力を高めるために

毎時の評価とは別に生徒は、ステージ毎に門池学習個票をもって活動しています。これは、生徒自身が自らの学習活動を示された観点に従って評価し、それを教師が指導・評価するというものです。生徒が、門池学習の時間を振り返る機会とするとともに教師が生徒の取り組みをよく観察し教師自身の関わり方について意識が高まることを意図したものです。

評価を検討する際、教師の加重負担を懸念する声もありましたが、評価の検討はいわば出口の検討です。出口を明確にすることで、取り組むべきねらいや指導する側の観点が明確になっていきました。

Ⅲ 生徒と教師の姿から

1 生徒の学習事例より

(1) トンデユク思考と環境問題への主体的な関わり

門池学習で鳥について2年間学習したK君は、2年目の学習で門池の鳥の種類と量が少ないことに気づきました。1年目の学習では、門池周辺にいくつかのポイント置いて、そこに飛来する野鳥の種類や数を調べ、想像したより多い野鳥の種類と数に驚きました。2年目は、調査のポイントを門池の水が流れ込む黄瀬川の牧堰において観察を進めました。その観察の過程でK君は気づくのです。黄瀬川の牧堰の水面上の野鳥の種類や数に比べ、門池の水面上の野鳥の数は少ない。それは、なぜか。K君は野鳥の生態に着目しました。鴨などは餌を漁るとき、尻を上にして水中の餌を狙います。しかし、それをするには門池は深すぎるのです。浅瀬はどうなっているのか。浅瀬は護岸工事で埋められていきなり深みに入っていきます。いわゆる瀬がないのです。K君の追究は続きます。門池を野鳥の飛来する池にしようとするのか、へらブナ釣りのメッカとしての門池を残そうとするのか、K君は、釣り針のある水辺には野鳥は飛来しないともいいます。浅瀬がないような護岸工事も釣りには適している。K君はこう分析しながら野鳥の飛来する池として門池が残されていくことを期待するのです。



観察での気づきが、野鳥の生態から護岸工事のあり方に進み、新たな課題へと発展していきます。野鳥→生態→護岸工事→門池のあり方というように「トンデユク」過程の中で知の文脈が生まれ、K君の環境問題への主体的な関わりが生まれています。

(2) 発想を創る；視点の移動と学習フィールドの拡大

門池の水質をテーマにしたOさんたちは門池の水質を調べていく中で沼津市立図書館に出かけ琵琶湖の環境問題に出会います。琵琶湖の水質汚染の原因に生活排水があることを知り、門池の水質汚染も生活排水に原因があるだろうと推測し、門池に流れ込む生活排水の実態に調査研究の目を向けていきます。

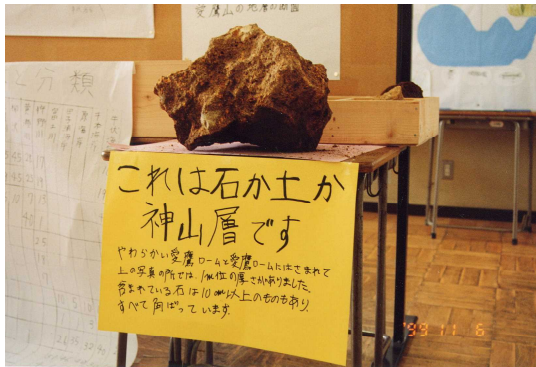
Oさんたちの学習は、門池の水質の調査研究だけにとどまらず市の図書館に出かけ、そこでの文献学習があつて、調査研究の新たな視点を得ています。学習フィールドの拡大が起こっているのです。門池の水質を調べるといふとりかかりが、学習を通して新たな課題へと発展しています。新たな課題がいくつかの発見や視点の移動を通して得られている例です。



(3) ゆとりの中の充実；チャンスを生かして学びの旅

O君たちは、門池中近くで行われている第二東名の工事に着目しました。そこに露

出した地層に特徴的な断層があることに着目し、その原因を追究していきます。地層を学習するのに基礎となる石の調査に門池周辺の芹澤川から原海岸、富士川へと調査



の範囲を広げ、拾ってきた石の形状分類をしていきます。愛鷹山の石は門池周辺に、富士山の石は黄瀬川から東に、富士川の石は原海岸、田子の浦、千本海岸にあると結論づけていきます。断層の角度に注目したのはk君です。V字型より深いU字型になっていることで大胆な推論を試みました。門池周辺は何かによって削り取られた、それは、氷河だということです。SFまがいの大胆な推論、その楽

しさ。

第二東名工事という間近にあるチャンスをきっかけに彼らの学びの旅は広がっていきます。この間、土砂の粒状分析という実験を行っています。ビーカー等を持ち出し、理科で学んだ実験方法を応用して実験していくのです。教科等で学んだ知が生かされています。発見した断層に勝手に自分の名前をつけたのはS君です。それが、箱根山の火砕流によってできた地層であることを発見した喜びはこの上なかったでしょう。

調査研究が重点的に行われたのは夏季休業です。生徒にとって「ゆとり」の時間が、充実した心のゆとりに変容しているのです。この学習を指導したのは校長です。本校では、全職員での指導体制をしきました。その中に校長もありました。

(4) 自由に研究する喜び；追究の旅を続けて



「普段の生活からは『考える機会もない、時間もない』、だけど『知りたかったこと』を自由に研究できて嬉しかった」。こう語るのは、「門池地域周辺の土地利用の変化」に取り組んだTさんです。彼女は、毎日の通学途上、門池が段々と変化していくことに気づきます。その変化の過程をテーマにし、それはなぜかと追究していきます。図書館、明治史料館、市役所等へと追究の旅を広げま

す。加えて、地域の人にインタビューをして歩いたのです。

彼女は、土地利用の変化を門池地域だけにせず、全国、静岡県、沼津市、岡一色と調査対象を広げ、時代背景と結びつけるという留意点を自らに課していきます。

そして、あたり一面が水田、畑地だった戦後の日本が国土を発展させるために公共施設を建設したり、道路用地を拡張するようになったことで、水田や畑地が見られなくなったとその変化を指摘する一方で、日本人の食生活の変化にも目を向けています。パンや麺類などに押されて消費が減少していく米、減反政策や安い輸入作物の影響を受けて生産自体が減少していく農産物、そうした我が国の農業が抱える問題を土地利用の変化の中に指摘していきます。

Tさんは、門池学習の級友の発表を聞く中で友達の発想に触れ、新たな考えを示唆されたり、自分の思考方法などを知る機会にもなったりしたと評価しています。友の話の聞くということも重要な学びの一つです。

(5) 学びを通じた成長の跡

生徒達は言います。「見ているようで見ていなかった。」「全体会の発表が歴史とい

う点で僕の中で一つになった。」。

門池中は、年1回の門池学習発表会を開催し始めました。これは、その発表会に寄せられた生徒の感想です。発表会は、新たな自分の発見です。仲間の発表を聞いて、その内容を理解するのではなく、自らが同じテーマに関われば関わっているほど、自分を見つめ、自分の中に新たな知が生まれていきます。見ているようで見ていなかった自分の発見、全体発表の内容を自分の中でテーマ化して再構築している生徒、そこに学びを通じた成長の姿があります。

2 生徒の変容を考える



門池で水を採取している生徒、スケッチしている生徒、市立図書館へ出かけて文献を漁っている生徒、夏季休業中、職員室に現れて図書室で調べたいことがあるのですが、と申し出る生徒、グルメ街道のコンビニを調査して歩く生徒達、車の通行調査に励む生徒、スーパーに聞き取り調査に出かける生徒等々、土日や長期休業等で学習行動を起こしている生徒が極めて多くなっています。宿題的な行動ではなく、そこに生徒の発意と創意があるのです。

彼ら自身が現実社会に関わり、そこで学び取っている姿を多く見かけるようになりました。ゆとりの中で生きる力を育むのだといいます。それは、土・日や彼らの最もゆとりともいえるべき長期休業中にどのような生活ができるかという問いです。

総合的な学習は特効薬や万能薬ではありません。総合的な学習を実施することで、生徒に劇的な変化が生じるわけがないのです。新たな状況は新たな課題を生みます。だが、総合的な学習で、彼らが抱えている課題意識なりテーマは、自らの時間の多くを主体的に学ぶ時間に費やすようになっていきます。積極的に生きる姿です。少なくとも彼らの貴重な時間を自分の意志で課題解決に使っているのです。「するな」「やるな」の指導から「こうしたい」「ああしたい」という意識の変化が生徒に生まれています。そこに価値を見いだします。

コンビニで缶ジュースを一本一本買う生徒がいました。コンビニ調査で、彼らは消費税の仕組みに出会います。消費税は切り捨てで処理されますので、まとめて買うより一本一本買った方が切り捨てられていく額だけ安くなるのだそうです。門池学習での学びが彼らの消費生活に知恵を運びました。

3 教師は変わったか

(1) アイデア豊かに

門池講座の原型にもなった地域の職業人を招いて行われる進路パビリオン学習は地域の職業講話として本校の生き方教育に定着しつつあります。平成11年度には、2年部の創意で職業体験活動が実施されました。兵庫県のトライやるウィークを研究し、夏休み、家庭と連携して職業の実際を体験的に学ぶ活動を始めたのです。



これで、1年生の家事体験、2年生の職業体験、3年生の進路選択という進路学習の体験的な取り組みの体系ができあがりました。3年生は今年、トライやるウィークを振ってトライやるデーを産み出しました。3年間の総決算を地域に返そうという試みです。

第4ステージにおける学年・学級を集団にした門池学習の取り組みでは、各学年で様々な知恵が飛び交い

ました。2年生の現代的課題を特集にして作成した新聞も1年25分講座も門池学習新聞も教師の発想から生まれました。3年の卒業論文もそうです。文化館のコーナーをアイデア豊かに充実させる教師もいます。

総合的な学習は各学校の創意工夫を求めています。結果的に学年・学級に創意を余儀なくする状況を作ります。その中で教師の創意が磨かれていきます。

(2) 生徒に寄り添い学びを支援して

生徒の学習行動が校外に広がるのと同時に生徒と行動をともにして学びを広げる教師が増えています。

スーパーの聞き取り調査、文化財発掘現場での調査、門池周辺の野鳥観察、石の採掘等々生徒の求めに応じ行動をともにする中で門池学習の資料収集はもちろんのこと、生徒との信頼関係を作ることにも成功しています。不登校だったY君を発掘現場に連れだし、不登校の状況を改善させた教師もいました。同じく不登校気味であったK君も、家庭の協力を得ながら門池学習発表会で活躍するなどするうちに不登校状況が改善されていきました。

「面倒を見ただけ生徒は指導を受け入れます。」。若手の教員のこの一言に教師の変容とその成果の一端が表れているような気がします。



(3) 見え始めた学習観の転換

校内の学習環境整備に学習指導的発想が見られるようになっていきます。門池文化館と同様な発想で廊下に植物が置かれ顕微鏡が用意されたり、生徒の作品が掲示されたり、教科内容に関する掲示物があったりします。総合的な学習では学習は生徒の中で成立しているとみるべきです。生徒の気づき、関心、こうしたものが生徒の中でつながって組み立てられていきます。掲示は強制されない「自ら」の学習を形成していくための一つの手段です。生徒が意識して掲示を見た時、掲示は生徒にとっての「教材になる」のです。教師の学習観の変化が起き始めました。

IV 地域との新たな出会いと新たな関係

門池講座等を通して学校を開いたために地域から様々な協力を得ました。東名インターグルメ街道振興会のホームページには本校のホームページがリンクされています。その振興会から未来の門池想像図パネルをいただいています。貴重な昭和

初期の写真を提供してくれた旧家もあります。石器を寄付してくれた方もいます。門池講座の講師に地域はすぐに応じてくれます。この講師達を通して新たな講師が紹介されたりします。門池にへらブナを放流したり清掃活動に取り組んだりしているボランティア団体、門池愛好会との出会いもありました。門池学習の起ち上げと並行して行われたことに門池の森造成がありました。PTAや地域の力によって造成されたこの森の維持管理に地域ボランティアが深く関わっています。総合的な学習の起ち上げを契機にして学校と家庭と地域のそれぞれの壁が低くなって、学びを通した三者の連携が進んでいます。

V 成果と今後の課題; 見えた課題から新たな出発

1 見えたいくつかの課題と困難さ

(1) 学習観の転換を探って; 揃わない怖さにぶつかること

すべての机が前を向き、黒板があって、教師がいて、教科書があって、教師の用意したプログラムでという従来の教室型学習観で、総合的な学習を起ち上げることは不可です。私たちが最初にぶつかった壁はこれです。揃える学習になれなかった教師達がバラバラな学習目標や内容を持ち、しかも自主自立の育ち具合が皆違う生徒を前に、その育ち具合のバラバラの様を見せつけられるのです。改めて「自己課題をもって」取り組む学習の重要性を思い知らされたのでした。恐らく、すべての中学校が最初にぶつかるであろう、総合的な学習の推進上の課題が具体をもって見えたのです。

(2) 学校システムとのジレンマ

野鳥グループにいる生徒が登校中に学校前の芹澤川の1点に目を注いでいます。その目の先に追うと鴨が水面に三角形の波形を描いています。彼女は、その波形がおもしろかったのかもしれないし、鴨の泳ぐ様そのものに興味を引かれたのかも知れません。じっと目を凝らす1年生に8時が迫ってきます。遅刻するぞと我に返す指導が必要なのか、この気づきを大切にするか、いずれを選択するのか迫られます。「風さんとお話してたの」(子供賛歌集I)が思い起こされます。

(3) 生徒の学習を看取る力を

例えば、インタビューには正しく失礼のない日本語を話す力と要点を聞き取る力が、文献学習には読む力が、レポートをまとめるには書く力が、発表するには論理的に話す力が必要です。総合的な学習を推進していくには、この場合の国語の力のように各教科と密接に関連した学力が必要とされる場面が出てきます。生徒の学習活動はどのような学力を発揮しているのかを看取る力が教師に求められます。教科で培った力が「総合」で生かされ、総合で培った力が教科で深められるという教科等との相乗効果が求められます。それを確かめていく力です。

そうした視点での本校の研修は、それに気づいた程度です。この点での教師の評価の研修も深めていく必要があります。

(4) 学習環境に配慮したカリキュラム編成

本年度、パソコン室に40台のパソコンが配置され、すでにインターネットが動いています。この環境は学校でできることとしてのインターネットの活用を生徒に強く印象づけました。

現在、金曜日の第6時に位置づけて全校で門池学習を実施していますが、学年で実施日をずらすなどしてパソコン室や図書室が円滑に使用できる状態を模索中です。来年度の検討課題とされています。

2 新たな出発; 課題を持たない生徒をどうするか

(1) 総合的な学習が苦痛な生徒

残念ながら門池学習に取り組もうとしない生徒もいます。なぜ門池学習なんて考えたのですか、と問う生徒もいます。テストで何点とれるか、という学習観を抱いてい

る生徒にとって、門池学習は苦痛の時間でしかありません。身につかせようとしている学力と生徒が現実抱えている受験のイメージ。この間にあって生徒の心は揺れ動いています。これを受け止めてやりながら推進していく難しさがあります。

(2) 研修推進の中で；自己課題を持てるために

3年生の取り組みを事例にして研修を深めました。門池の水質に取り組んだ生徒は、琵琶湖の環境問題を学ぶことで生活排水の問題に行き着いています。門池の水質という局地的な課題追究は環境問題という大局的な学習があって視点が定まります。鳥に取り組んだ生徒の気づきも環境問題というフィルターをかけることで新たな展開が可能です。

こうした事例を分析する中で、「自己課題」を持って学習に取り組めるようにするために門池学習のカリキュラムそのものの転換を図りました。概略は下記のとおりです。

- ①「自ら課題を見つけ、課題別集団で調査研究し、発信する」のを3年の学習内容としました。昨年の門池学習と同様です。
- ②1年で門池体験、環境体験、福祉体験等で体験的に「門池」を学びます。
- ③2年で環境、国際理解、少子高齢化等の現代的課題を学びます。
- ④必修行動を課しています。総合的な学習は受けるのではなく、行動するという発想です。学習行動の基本として5つの行動を示しました。それが必修行動です。
- ⑤網目の学習；発想の広がりを書き出す学習、1事例から次々に事例を広げていきます。

(3) 2歩進んで1歩下がる

平成7・8年度県教委指定に取り組んだ職員は現在わずか3名。本校の指導案に込めた研修を継承していける素地が薄れていっています。門池学習も同様です。総合的な学習は見方を変えれば教育課程の自主編成です。地を見て人を見て最善のあり方を探ります。それが、自校の研修です。

平成11年度末の人事異動で本校は校長・研修主任をはじめ教員の約半数が異動しました。研修成果が人の上に積み重なるとするならば、門池学習をはじめ本校のいくつかの取り組みは2歩進んで1歩下がる状況が生じたということです。

門池学習の新たな展開は、カリキュラム色を強めることでこれに対処しようとした側面があるのです。

3 まとめにかえて

門池学習は、総合的な学習として構想されて研究実践をしてみましたが、それが独立して実践されているのではなく、新しい学校づくりの具体の一つとして位置づけられているのです。生徒の自主的な学習を促そうとすればするほど、自主性を育てる学校体制が重要になってきます。それは、学校としての指導内容、指導方法、教育課程のあり方、学校経営等の創意と工夫改善でもあります。総合的な学習は、まさしく、「生きる力」が育つ学校としての総合的な学校改善の上に実践できるものという感を深くしています。

本校の学校改善の取り組みは、門池学習という総合的な学習の時間の起ちあげに始まり、教育課程全体の改善、教室配置等の工夫、学校運営システムの改善に手を広げた広範囲のものになっています。それは、総合的な学習の起ち上げは、それだけでは不可能で、学校全体の改革が必要という本校の理解の具体です。さらに、学校・父母・地域との連携も必要で、門池学習の推進にあたっては、門池講座に代表されるように地域や父母とのいっそう密な関係を作っていました。

門池中の校地内におよそ3000平米の花木の森を造るという門池の森の造成事業がスタートしたのは平成11年4月23日でした。門池中25周年、門池連合自治会発足記念事業、江原素六先生官有地払い下げ100周年を記念して起こした事業でしたが、現在、江原素六先生顕彰会の木、金岡奨学会の木、門池連合自治会各自治会の

木、P T Aの木、各学年・学級の木等が植栽されて季節ごとに様々な花を咲かせ、地域の人々や生徒の目を楽しませるに至っています。

この森の維持管理に活躍したのはP T A本部とボランティアの生徒達でした。学校（生徒）・父母・地域が連携した活動が起こされてきているのです。

そうした土壌の上に門池講座が開催され、地域から講師が招聘されて、生徒の学びも開き、という具体的な地域と連携した学校教育活動が可能になってきます。

新しい学校づくり、それは奇をてらうことではなく、学校の隅々にまで学校が育てる機能を有するために改善を加え、開かれた学校として機能する具体を描くことだと今感じています。